

# John Felstiner: Paul Celan. Eine Biographie

Verlag C. H. Beck, München 1997. Deutsch von Holger Fließbach.

助 廣 剛

著者フェルスティナーはアメリカの文芸学者。スタンフォード大学の英語・ヘブライ語教授。本稿の対象はドイツ語訳だが、原著は英語であって、この方の書名は Paul Celan—Poet, Survivor, Jew. (パウル・ツェラーン。副題：詩人、生き延びた者、ユダヤ人) である。

全十八章が六章ずつの三部に分かれ、第一章「傷」Wund (Stricken) は1920-1957年、第二章「探索」Suchend (Seeking) は1958-1963年、第三章「現実」Wirklichkeit (Reality) は1963-1970年を扱って、ツェラーン(1920-1950)の一生をカバーしている。第一次世界大戦直後に始まり、ナチの台頭と独裁、第二次世界大戦、その間のユダヤ人大量殺戮、強制労働からの生還、戦後の混乱、中東戦争、旧ソ連の支配、故郷放棄、パリ移住、ユダヤ国家の再建へと続いた、第一級の激動の歴史のただ中であつた五十年の生涯を、時の経過にしたがってたどっている。巻頭の「謝辞」によると、1991年に亡くなった詩人の妻ジゼルを始めとする多くの近親、知友の援助によって、間近に見た詩人の生活と創作の実際を復元する立場に立つことができたと言う。この点については、詩人の死からやや遠くなってから書かれたことに、この著作の持つ意義の遠因を求めるべきだろう。ずっと早く書かれたものには1979年のイスラエル・ハルフェン『パウル・ツェラーン』、1986年のゲーアハルト・パウマン『パウル・ツェラーンの思い出』があり、前者は詩人の前半生を十一歳年上の同郷人として書き、詩人と同年生まれの後者は、六十年代の後半にしばしば詩人の訪問を受け、多くの対話の時を持った者として後半生を、それぞれの立場と見識で書いている。詩人ならびにその周辺との距離の近さ、そのことから得られる経験の直接性、知識や情報の豊かさではこちらの方に軍配が上がる。フェルスティナーの著書は、詩人を知る人々がまだ少しは存命で、ツェラーンに関する各種の著書が出揃った時期に、これまでにはない要素を加えて、生涯と作品の全体を描いたところに特徴がある。

著者はユダヤの事に明るい。その歴史と世界観、言葉と生活のすべてにわたって豊かな知識を持っていることが叙述に見てとれる。そしてこのことがツェラーンという詩人の存在の描写に、片寄りのない光をあてることを可能にしている。この言い方には矛盾があると言われるかもしれない。ツェラーンが詩の言葉として、ルーマニア語やヘブライ語ではなくドイツ語を選びとったことは、ヨーロッパの詩人にはよくあることで、偶然から生じた必然であるが、幼少年期の境遇からすればそれも自然な成り行きであつたし、ツェラー

ン自身が、心の奥に潜むものを表現できるのはドイツ語しかないと言っている。このような紛れもないヨーロッパの中のドイツ語詩人の有り様について考える際に、あえてユダヤを持ち出すことはないのではないか。ツェラーンを語る時に、ユダヤ性を強調することの意味合いについては様々な議論があり、また作品の解釈については、ユダヤ的なものを読み込みすぎることが非難されるのも稀ではない。現代のヘルダーリンと呼ばれることもあり、リルケやゲオルゲとの関連も深く、その作品はドイツの詩史の中の現代における高峰とされているのである。そういう詩人を語るのに、著者は様々な局面で不可欠の要素としてユダヤ性に言及する。ツェラーンの本性にはユダヤ的なものがあり、ツェラーンが魂の問題として詩を追求してゆく過程は、同時に自分自身の血の中にあるユダヤ性の探索の道程でもあるからだと言う。これはつまり、ツェラーンの中のユダヤ的なものを大前提とすることが、かえってこの詩人をヨーロッパ的存在にする条件だと言っているのである。こうしたことをわきまえた上で、フェルスティナーの著書を、ツェラーンにおける『詩と真実』と呼んでみたらどうなるか。ゲーテの用語法を遠くに見すえながら、どんな比喩化の手続きがツェラーンの場合を浮かび上がらせるかを考えてみようと思う。

『ストレッタ』の解釈は、ツェラーンの詩の読み方について、フェルスティナーの手法の基本を教えてくれる。

Verbracht ins

Gelände

mit der untrüglichen Spur:

Gras, auseinandergeschrieben. Die Steine, weiß,

mit den Schatten der Halme:

連れて来られた

土地

紛れもない痕跡

草 離れ離れに綴られ 石たち 白く

茎の影を写す

『ストレッタ』の冒頭である。フェルスティナーを引く。「誰が、あるいは何が連れて来られた (*verbracht*) のか。どのようにして、どこへ。ツェラーンはかつてある人に、戦時中に強制労働収容所で過ごしていた (*verbracht*)、と語った。*verbracht* には専門用語の意味もあるのだろうか。ツェラーンの指示によったこの詩のフランス語訳は *Déporté* (《*Deportiert*》) で始まる。しかしドイツの公文書はふつう *deportieren* を使っており、ツェラーンは『夜と霧』の *déporter* を訳すのに *deportieren*, *verschleppen*, *aussiedeln* を用いた。だから『ストレッタ』で彼

が使った *Verbracht* に対して deportiert では遠回しな言い方になってしまうだろう。一方でフランスのキャンプに収容されたあるドイツの亡命者は、当時を回想して犠牲者の立場から《ヒトラーがユダヤ人を彼らの家からむりやり引き離してどこかへ *verbracht* したことを我々は知っている。》と語った。日常の言い回しで、すべての住民と、この詩に入り込んだ誰もが『連れて来られた／土地／紛れもない痕跡』を見、『草 離れ離れに綴られ 石たち 白く／茎の影を写す』のを見出すのである。」(163 ページ) „*verbracht*“ の理解のために傍証を用いるにしても、言葉の用法に集中して解こうとする姿勢が、ここにははっきりと出ている。これがこの著者の特徴である。ユダヤ人の強制移送という出来事を踏まえている点は同じだが、「移送された者たちはいまや収容所の《敷地の中へ運び込まれた》のである——ツェラーンの詩『ストレッタ』で示されているように。そしてこの詩の伝記的背景となったのは、ここで記した出来事である。」(訳書 180 ページ) と述べるハルフェンとは伝記的事実の扱い方が違う。「ツェラーンの作品を完全に理解するには、伝記的背景の知識が必要とされる」(訳書 7 ページ) と言うハルフェンの主張と立場が間違いだと簡単に言うことはできない。フェルスティナーは伝記的背景を知った上で、言葉の用法の議論に執着しているのである。因に、パウマンは上記の著書で、回想という心理的行為とその内容の扱い方について、きわめて慎重な態度を貫いている。

ツェラーンの詩には日付が付き添うことが多い。日記や手紙、友人たちの話などにつきあわせると、しばしば実経験が背景として見えてくる。くわしい日付を特定できなくても、『死のフーガ』や前述の『ストレッタ』がナチの強制収容所やユダヤ人大虐殺という、世界の歴史にとってもまれな経験から生まれたものであることは、解釈の上で明かである。現実あつての詩であり、一種の経験詩ではあるが、詩の中に取りこまれた現実、実際の時と場所にそのままふたたびもどることはできない。詩作行為の中で常に今と過去とが融合することをツェラーンは願っていた。この詩人における詩と真実に顕著なのは時間の要素であって、それはある時は第二次大戦と今とを、またある時は旧約の時代と現代とをつなぐのだが、この太く強力な軸を通じて現実には比喩化され、フィクションへと媒介される。人の場合で見れば、たとえばヒトラー暗殺計画に加わって殺害されたグリーンシュパンは、当時は知らない者のないひとりの人の名前であって、詩の中に入るとまずは人々の記憶を呼び覚ますサインとなつてはたらく。詩としての統一的印象はその後からやってくる。《グリーンシュパン》はひとつの現実を担いながら、時を超えて読む者の魂にはたらきかける象徴となる。作品とそれが生まれた日時がしばしば同行するのは、ツェラーンという人の性格特徴を示すものとして納得すればよい場合もあるが、晩年の詩集《Schneepart》(1968 年) では、作品の下に意識的に成立の場所と時とを書き留めた例があるほどで、彼の詩は「書いてゆく過程で明かになってゆく自我」(ツェラーン) の証しであり記録であるから、歴史に日付があるように、その詩には成立の時を示すしるしが欠けてはならないのである。

ツェラーンの詩は謎めいていると言われる。そのドイツ語そのものが謎を含んでいるとも言われる。難解であることのそれが最大の理由ということになっているが、フェルス

ティナーは、ドイツ語とヘブライ語とのあいだの関係を利用して、一種の言葉遊びを詩人はしていると言う。一例をあげる。「《Dein Aug, dem Nichts stets entgegen》はヘブライ語では魅力的な言葉遊びだ。ayin《Auge》はen《nichts》と、綴りはことなるが音はまったく同じである。《絶滅》あるいは神の不在の《無》にみちているユダヤ人の目には、よりによってヘブライ語の《目》と《無》とがひとつのものと映るのである。」(236 ページ) ヘブライ語については、旧約聖書のユダヤ人に起こった出来事に関わるヘブライ語起源のドイツ語もあり、著者によればそれらはいたずらに困難を増幅しているのではなく、ドイツ語に刺激を与えリフレッシュするのに役立っている。

旧約聖書、ユダヤ民族とその歴史、ヘブライ語——ツェラーンの詩を読むとかならずこれらを意識せざるをえないならば、逆にこれらを知ることによってその詩の理解は完結するのだろうか。ユダヤ的なものの知見がきわめて大事であることは、フェルスティナーの著書によっていっそうよく理解できるのであるが、この反問に答えることは簡単ではなさそうだ。著者の素養をもってしても、ツェラーンの詩の語法上の難点は解消されない場合が少なくなく、その詩にどれほど強くユダヤ的傾向を感じてよいかの疑問と不安は、読後にも消えることない。「とくに詩の場合には、私にとってユダヤ性は時として創作テーマ上のというより霊的な( pneuma ) 関心事です——心の問題です。ユダヤ的なものをテーマとしても扱わなかったというではありません。そういうものも現にあります。おそらく私の詩集のどれにもあるでしょう。私の詩は私のユダヤ性を暗に含んでいるのです。」(355 ページ) 1970年にイスラエルの日刊紙 Haaretz の編集者 Gershom Schocken に宛てて書いた手紙の内容は、詩人の終生不変のそして最終の真情を伝えていよう。こういう本性の人が書いたドイツ語の詩と詩集が我々の前に置かれているわけである。

原著は明解な英語で書かれている。ドイツ語訳はそれを忠実に再現していて、原著に劣らず明解である。あらためて英語とドイツ語の近さを感じた。時には原著にもどって氷解したということもあるが、内容把握にドイツ語訳で困るということはない。いろいろな意味で等身大のツェラーンを描くことに成功した著作である。

追記 Israel Chalfen: Paul Celan. Eine Biographie seiner Jugend. Insel Verlag 1979. これは最近翻訳された(イスラエル・ハルフェン:パウル・ツェラーン——若き日の伝記。相原勝/北 彰訳。未来社、1996年)。1920年にブコヴィーナに生まれてから、大戦後故郷を離れパリに住むところまで、ほぼ三十年間の詩人の前半生を描いている。著者も1909年ブコヴィーナの生まれ、ツェラーンより十一歳年上の同郷のユダヤ人である。詩人とほぼ同じような経歴と体験の人で、トランスニストリアへ強制移送されたが解放まで生き延びた。若い頃のツェラーンの伝記を書くようにと著者に促したのは、詩人の若い頃の女友達で重要な存在であったルート・ラックナーであった。「ツェラーンと同郷人なので、伝記的な事柄が、一般に考えられているよりもはるかに大きな意味をもっていると、始めから考えていた」(訳書8ページ) ゆえに、また「今が情報と事実を伝える資料を集めることのできる、おそらく残された最後の機会であると思われた」(訳書7ページ) ゆえに、詩人の死

の直後 1971 年の秋に仕事を始めたという。動機はフェルスティナーの場合とよく似ている。この仕事にもそれなりの《詩と真実》の関わり方が読み取れる。特に詩人の日常生活がくわしく書かれているので、二冊を並べて読むと良いと思う。なお原著にない訳注と年譜は読者にとって大変有益である。